



生き方を見つめ直す珠玉のエッセイ21篇

「こういっう人に私はなりたい」

M・アウレリウス―心自由に、運命を悲しまず

木村尚三郎

三宅雪嶺―地位と名譽が何ほどのものか

谷沢永一

P・ルコント―今だけが幸せてあればいい

安藤優子

田中正造―『天皇直訴』後の晩年の潔さ

佐江衆一

石坂泰三―偉大なる経済人の偉大なる平凡

岩川 隆

開高 健―神のごとく存在した釣り師

高橋 昇

川路聖謨―粘り強く礼儀正しき外交官

山内昌之

広田弘毅と石田禮助―真の氣骨

渡部恒三

金谷上人―無類の高僧の熱氣、恐るべし

神坂次郎

マキノ省三―一千本を撮った日本映画の父

浅田次郎

無責任男―こういっうやつで苦勞さん

関川夏央

夏目漱石―大知識人の言う「自己本位」とは

池部 良

升田幸三―天才なればこそ言えるセリフ

内藤国雄

馬 存―「愚痴」を歌わない稀有な漢詩人

草森紳一

A・ダビッド―女性探検家の凄絶な生

コリーヌ・ブレ

伊能忠敬―五十歳からが人生本番

童門冬二

本田宗一郎―立志伝の男はゴルフも痛快

梶原一明

ヘンオドス―彼こそゴジズムの原点

高木仁三郎

伊集院静―あの徹底生活に憧れる

黒田 清

G・ナガマツ―差別乗り越え屈指の名医に

寺澤芳男

藤沢秀行―真似たら破滅する酒、博奕、奇行

川上信定

一挙90枚 戦慄の超近未来ドキュメント

上原 大

(政治評論家)

'96年9月、北朝鮮軍ソウルを制圧す

―金正日の奇襲「白頭山作戦」は日本にも飛び火、北陸・原発銀座にノドンが撃ち込まれて―

146

梶山静六、竹下登の圧力はかくも凄まじかった

銀行が敗北した日

住専処理追加負担 舞台裏の攻防

須田慎一郎
(ジャーナリスト)

298

シリーズ「団塊の証言」⑤歯車から経営者への挑戦

われらミドル「会社を捨てて会社を創る」

小野瀬健人
(ルポライター)

312

「日本再見録」

①教育現場で啞然、呆然

文/H・F・マクブライト 訳/林望

102

異色の大蔵官僚 大いに語る

榊原英資VS.田原総一郎

「官僚の言い分も聞いてくれ」

220

大ブーム―夢と野望と錬金術が「革命的理論」にからみついて……

安田吉伸
(フリーライター)

「波動は人類を救えるか」

巻頭エッセイ「どこ吹く風」 猫のスカレット

丸谷才一

120

政界デビュースロート

小沢一郎、かくして凋落の二途

国平修身

138

スポーツ・リジカル派宣言

「四百以障害」山崎一彦は数学者だ

二宮清純

326

下町人情を描写する

両国ブギウギ―プロの面目丸つぶれ

工藤美代子

294

素敵な素敵なシラフの世界

「さかだち日記」(第2回)たまには負けることもある

中島らも

核心インタビュー

新井将敬

「薩長同盟」を決断すべき時がきた

124

野崎研二―遠藤被告と小野容疑者を弁護して

126

山本和範―四十五歳までは「まだまだ伸びる」

128

浅塾正吾―日本の電子マネーは法整備が急務

130

182

「日本を震撼させた怪人の軌跡」最終回「ポア」はこうして始まった

麻原彰晃「終わりなき狂気」

高山文彦
(ノンフィクションライター)

245

赤ジウウタンも三度笠で踏むのか?

バイパーガッツ石松と憲政の常道

中田 潤
(フリーライター)

232

集中連載―足利幼女殺人事件Ⅱ「私はやってない」と被告は叫んだ

控訴棄却―DNA「185の確率」は真犯人を明かしたか

小林 篤
(ルポライター)

204

シリーズ対論Ⅱ「20世紀」は人間を幸福にしたか(最終回)

京都安楽死事件と患者の尊厳を考える

星野一正
(京大名誉教授)

284

教祖なし、お布施なし、宗派も自由……

「じわり」広がる「一人一寺」心の寺運動

吉田敏浩
(ジャーナリスト)

110

真の極楽人生とは何か

河合隼雄VS.瀬戸内寂聴

あなたにもできる「在家出家」のすすめ

(国際日本文化研究センター所長)

174

緊急レポート―これこそ問題の本質

W杯「日韓共催」はアジア蔑視の産物だ

二宮清純
(スポーツライター)

本田清春氏「私」の同時代「ノー」は絶叫「エ」より外観いたします

控訴棄却 — DNA「185の確率」は真犯人を明かしたか

(ルポライター) 小林 篤

裁判長の口調は、とてもソフトだった。

「菅家さん、判決本文の申し渡しをします。」

ちょっと長いですから、座って聞いて下さい。」

五月九日。東京高裁八〇三号法廷で、高木

俊夫裁判長は『足利幼女誘拐・殺人・死体遺棄事件』の被告人に着席を促すと、一呼吸おいて判決を言い渡した。

「本件控訴を棄却する」

傍聴席の大半を占めた被告・菅家利和の支援者たちから、ざわめきが起こる。記者たちが第一報を送るため、あわただしく席を立つ。そして、法廷の主役は、ややうつむき加減に前方を見つめたままビクリとも動かなかった。

二日前小菅拘留所に面会に行ったときだ。

菅家被告は喜色満面といった表情で、接見室に現れた。

「このあいだ、弁護士さんたちがきて、＼ここを出たら何したい？」って聞くから、自分は寿司が食べたかったって言ったんですよ」

控訴審の法廷と菅家被告
(逮捕当時)

彼が逮捕されてから、四年半の月日が経つ。

当時は頬がやせこけて体重も四十五キロしかなかったが、いまは十キロ以上も増えたそう。百五十五センチの小柄な男はいかにも人の良さそうな人相になった。彼はほかに、ステッキ・天ブラ……といくつも食べ物の名を挙げてから「でも、本当は……」と、嬉しそうに言葉区切った。

たその幼女の遺体検分と司法解剖の写真が焼きついて消えない。

1 挙手

菅家被告控訴審裁判は、とりわけ法曹関係者の間で大きな関心を寄せられていた。被告人の自白をのぞいて確たる物証はなく、DNA型鑑定に「有罪立証の柱」となるだけの証拠能力があるかが問われた。控訴審における初のケースだった。さらに、一審では公判途中に、菅家被告は犯行を否認し、認め、また否認と三度ひるがえしていた。そして、前言を撤回するたびに、「ごめんさい」と謝まるのだ。これまでの冤罪の事例と比べても、かなり特異な対応をみせる被告人の、自白の信用性と任意性も争点の一つとなっていた。

一審の弁護人(二人の私選弁護人)は、DNA型鑑定の証拠能力に疑問を呈したのみで、具体的な論議をしないまま弁論を終えていた。自白にいたっては、主任弁護人でさえ取材に対して「やってねえことはないだろ」と話し、菅家被告の有罪をいまでもって疑わない。だが一審判決後、無実を訴えて控訴した菅家被告の弁護を、手弁当で引き受ける弁護士

が現れた。日弁連の鑑定委員会のメンバーとしてDNA型鑑定と刑事弁護の問題を研究し、論文も発表した佐藤博史だった。

佐藤は、DNA型鑑定の個人識別能力の高さを認める反面、それが両刃の剣でもあることを危惧していた。先端科学である遺伝子学を応用した鑑定法だけに、専門的な知識がないと、その実際の運用に誤りがないかを吟味することが困難なのだ。今後ますますDNA型鑑定は犯罪捜査に活用されるに違いない。

彼は仲間の三人の弁護士に呼びかけ、菅家被告の控訴審の準備を始める。三ヵ月後、彼らは四百五十八頁の控訴趣意書を書きあげた。

九四年四月に控訴審が開始されると、主任弁護人佐藤を筆頭とする弁護団は原判決と真に向かい対決する事実評価とその立証を精力的に展開する。検察もその応戦に追われ、審理はかなり突っ込んだものとなった。結審まで二年にわたり公判十七回を重ねた弁護団の労苦は、最終弁論で提出された弁論要旨に集約される。それは本文だけでも二百字詰め原稿用紙にして、四千六百四十枚に達した。

そして、十八回目の公判となるこの日。裁判長に控訴棄却を宣告された瞬間、五人の弁護団は、動揺の色を隠せなかった。主任弁護

「カラオケ、思いきり歌いたいです」

町内のお寺で年中行事となっていたカラオケ大会では、何度か準優勝したことがあるそう。NHKの『のど自慢』の子選にも出場したという。彼から自慢めいた話を聞くのは初めてだった。それならカラオケのある寿司屋で歌いまくるのはどうかと言うと、菅家被告は右手をあげ、掌を頭の上でパツと広げた。

「あの、スポット・ライトも欲しいです」

照れたのだろう、顔を真っ赤にして、そう言った。この四十九歳になる小心そうな被告人は、四歳八ヵ月の幼女を殺して全裸にし、性的いたずらを加えた後、川原の草むらに捨てたという疑いで逮捕されたのである。三年前に宇都宮地裁における一審で有罪、無期懲役の判決が下されているが無実を訴え控訴した。そしていま、二審の判決を直前に控え、すっかり無罪判決を確信しているようであった。だが、ぼくの脳裡には、現場に棄てられ

人の佐藤はみるみる顔を紅潮させた。

高木裁判長が主文に続いて判決理由の朗読をはじめると、検事は余裕の腕組みをしなから何度大きく頷いた。判決はDNA型鑑定の証拠能力を積極的に認める内容だった。DNA型鑑定は、一定の信頼性があるとしてすでに専門家に受け入れられている手法であること。鑑定作業を担当した技官は、必要知識・技術・経験を持っており、特に落ち度はないこと。同じ血液型及びDNA型を持つ者の出現頻度が、当初、千人に一人と考えられていたのが、のちに百八十五人に一人と修正されたが、一審は数値の変動を当然の前提としているので、問題はないこと……。

つづいて、自白についても、裁判長は次のように積極的に評価した。

「被告人は控訴審公判で「取調べの警官や検察官や、また原審弁護人にも怖くて本当のことを言えなかった」と言いながら、同時に「真実ちゃんを誘拐し、殺して、死体を隠したことは、取調べの警官から、そうだろうと言われたからではなく、自分からしゃべった」などと供述している。つまり、自白に十分な任意性があることを何より本人が証言している。

足利幼女殺人事件の経過

'90 5・12	午後七時頃、真実ちゃん行方不明に
13	早朝、真実ちゃんの遺体発見される
11 末	寺崎耕造部長が菅家利和の借家を訪ねる。手塚一郎警部補、菅家の勤務するA幼稚園へ聞き込み
12・3	菅家の血液型は遺体に付着した唾液と一致。捜査本部、菅家の尾行開始
'91 5・22	警察庁がDNA型鑑定機器導入を内定
6・23	捜査本部、菅家の精液が付着したティッシュペーパーを採取
7 初	科捜研の福島康敏技官、科捜研の向山明孝技官に菅家の精液のDNA型鑑定を依頼するが受け入れられず
8・21	向山技官、DNA型鑑定依頼を受ける
8・28	警察庁がDNA型鑑定機器導入費用を大蔵省に概算要求
11・6	栃木県警より捜査本部へDNA型鑑定の報告
12・1	捜査本部、菅家を足利署へ任意同行
12・2	未明、菅家が犯行を自供、逮捕へ
12・26	DNA型鑑定機器導入費用が復活折衝において満額で認可

また、被告人の供述内容に厳密な意味での秘密の暴露が見当たらないとの指摘があるが、それは徹底した捜査がなされたからで、そのことから自白の信用性が低いとは言えない。また、犯行から一年以上経過した後の自供であるから、ある程度の記憶違いや供述の変遷は、不自然、不合理とは言えない——。

高木裁判長は、弁護側にとって重要な争点をこらした論理でことごとく斥けていく。そして判決文からふっと目を離し、被告人が幼女の死体を陰部までもなめ回したと供述したことに触れ、こんな感想を漏らす。

「だって、自分からなめたなんてふつうなら言えないですからねえ……」

開廷から三時間が過ぎようとしていた。長い判決の全文を朗読するのに疲れたのだろうか。裁判長は、まだ読みあげていないページをバラバラとめくりながら、言った。

「ま、それやこれや考えてみると、被告人の自白は信用できると……」

菅家被告は、最初に判決本文を告げられた時から、身しろぞり一つしない。彼は、テレビドラマの時代劇が大好きで、『達山の金さん』や『水戸黄門』などをよく観ていたという。佐藤弁護人から「無実だ」としたら、女の子を

いたずらして殺したなんて、どうして言ったの」と聞かれて、彼は「自分はやってませんから、やったと言っても、後で裁判官の人にはわかってもらえと思ったんです」と答えたとがあった。

いま、菅家被告の目の前にいる「金さん」は、時間を気にしながら判決文の残りページをつまみ読みを始めていた。そして、結論として控訴の棄却を繰り返すと、被告人を起立させた。

「あなたには、わかりづらかったと思います」

判決文には、被告人の知能や人格が劣っていることが指摘されている。

「精神状況鑑定書にもあるとおり、被告人の知能は普通域と精神薄弱の境界域にあり、人格の発達が未熟であると認められるが、保育園や幼稚園の送迎バスの運転手として普通に勤務していたのであり、このような人格にありがちな、暗示にかかりやすく、迎合しやすいという傾向を十分考慮（以下略）した高木裁判長は、親切心からそう言ったのだろう。ところが、それまで凍りついたように動かなかった菅家被告が、このとき突然、右手を勢いよく挙げた。

「ハイッー」

あわてて裁判長がそれを制した。

「あつ、ちよっと待って下さい。あとは弁護士さんから、よく説明を受けて……」

裁判長は菅家被告が判決の内容を理解できなかったと思ったのだろう。しかし、被告人は質問をしようとしたのではなかった。裁判長の言葉をささげるように、こう宣言した。

「自分は、やってませんー はっきり言えます」

被告人の意見陳述だった。

「あなたには残念だけれども、当法廷として認められな」

裁判長は早口にそう答えると、控訴審の開廷を告げた。有罪の判決を二度下されても、罪を認めることを拒否する被告人が、幕を閉

じた法廷にいた。

翌日、弁護団は菅家被告の冤罪を主張し、最高裁へ上告した。

つながらない糸

前回（一九九四年十二月号）のレポートでは、本件DNA型鑑定の出現頻度が理論上の数値に過ぎない「数字のマジック」であること、菅家被告が真犯人であるなにかかわらず、自白通りの犯行には現実性がないことの二点について書いた。そのとき取材した証言者のうち三人が、その後の公判で新証人として出廷している。

筆者は弁護団のように菅家被告の無実については、確信を持たない。しかし、今回あらためて取材したことで、疑問ばかりがさらに

増えた。それは、菅家被告を真犯人に結びつけた糸の一本一本が、じつはつながっていないのではないかという疑問だった。菅家被告が真犯人であるとの確証を握っているはずの警察関係者たちは、最初は取材に応じてくれるのだが、だんだんと口を閉ざしてしまうのだ。たとえば、こんな具合に。

「こりゃ、ここだけの話だぞ。書くなって」といって話してくれたことのなかに疑問が生じて、それを尋ねると、怒り出す。

「いくらほんとのこと言えつたって、まずいことがあつてな」

しかし、菅家被告が犯人だということには、ゆるぎない確信を持っている。

「なんつたって、奴はクロに違いねえんだ。十年先、二十年先の公判にも耐えられるだけ

の証拠固めをしてから、奴を起訴まで持ったんだ。そりゃ、振り返ってみても、あれだけ徹底してやった完璧な捜査はなかった。奴がシロになったら、世の中お終いだわ。人間が信じられなくなっぺえ」

ここから先は、足利事件に取り組んだ警察の捜査上の問題点について触れていく。

足利事件発生から犯人逮捕にいたるまでの一年半、警察はどのような捜査活動を繰り返したか。菅家利和が重要容疑者としてなぜ残ったか。彼が犯人として結びついた容疑性の一つ一つをあらためて確かめてみたい。

同時に、逮捕の決め手となったDNA型鑑定は、どのような経緯で実用化され、足利事件で使われたのかについても、検証する。

2 焦燥

もう一度、事件発生にまでさかのぼろう。

栃木県足利署に、真実ちゃんが行方不明になったとの通報が入ったのは九〇年五月十二日の午後九時四十五分頃だ。足利市の中心部にある「ロッキー」というパチンコ店で父親と離れて遊ぶうちにいなくなり、七時半頃に気づいた父親が捜しても見つからないため捜

索願いを申し出ると、数分のうちにパトカーが現場に急行した。

足利署では第一報によって全署員に招集がかけられ、さらには県警本部にまで連絡がとられて車で一時間以上も離れた宇都宮市からも刑事たちが駆けつけた。前夜にも子供が行方不明になって小学校の体育館で無事に保護される騒ぎがあったばかりだったが、警察のこの対応のすばやさには、もっと大きな理由があった。足利市では、七九年に万弥ちゃん、八四年に有美ちゃんというともに五歳の少女の殺害事件が起こり、ともに未解決のままとなっているのだ。

翌朝、徹夜の捜索も空しく、真実ちゃんは渡良瀬川の中洲で遺体となって発見された。この日のうちに捜査本部が設置され、県警ナンバー2の森下昭雄刑事部長が本部長に就任する。以下、捜査幹部に県警の精鋭を配置すると、専任捜査員百八十四名という異例の強化態勢が敷かれた。三件目となった少女殺害事件は、地元足利市民はもとより、県民全体に大きな衝撃を与えた。「悪夢三度、市民ショック」「またか、怒りと恐怖ひろがる」などの大見出しが躍り、マスコミは、こぞって警察を叱咤した。

ある捜査幹部は、真実ちゃん事件を、さきの二件と同一犯による警察への挑戦と受けとめたと述懐する。

「われわれ警察の存在を賭けた戦いでしたよ。足利を離れることはできませんでした」重要参考人の事情聴取にまでこぎつけたある殺人事件が、県警の捜査陣の主力を足利事件に集めたためにその参考人に失踪されて、未解決になったこともあったと悔しがった。

拒否されたDNA型鑑定

当初、捜査本部は、初動捜査が迅速で遺体発見も早かったこの事件は、目撃者証言も多く集まるものと踏んでいた。ところが捜査開始から二週間で六千件近く入手した情報に犯人につながる有力なものはなかった。捜査本部は各戸のローラー捜査の輪を広げ、捜査開始から一ヵ月で半徑一・三キロ、最終的には市内全世帯数五万二千のうち、三万五千世帯に聞き込みを実施した。

一方、現場に残された遺留品は、あまりに少なく、真実ちゃんのパンツの中にあった一本の陰毛と、下着半袖シャツに付着した精液痕ぐらいいしかなかった。

しかも、両方とも川に捨てられており、精

液痕は水でほとんどが流されて、残っていた精子はごく微量であった。

栃木県警の科学捜査研究所（以下、科捜研）では、下着の精液痕七カ所のうち二カ所を資料として使って血液型をB型と割り出した。

警察庁はDNA型鑑定を、この前年から犯罪捜査に試験的に使い始めたが、まだ正式な実用段階にはなかった。

五月末、科捜研で下着の血液鑑定をした福島康敏技官は、警察庁科学警察研究所（以下、科警研）でDNA型鑑定の研究に取り組む向山明孝技官に、この下着の資料でDNA型鑑定が可能かどうかを問い合わせる。しかし、科警研の向山技官の答えはノーだった。資料が微量すぎるという理由からだった。

一方、遺体についていた唾液から真実ちゃん

んに犯人が性的にいたずらを加えていたことが推測された。捜査本部は、犯人像を四つのポイントから組み立てた。①血液型がB型の男性。②性的異常者。③幼児に興味がある。④土地勘がある。

各捜査員はこれらに該当する市内の住民をローラー捜査で探し出し、唾液による血液型検査やアライバイ捜査などでふるいにかけた。ビデオショップや通販業者などから情報を与えてのロリコン愛好者・交際者の捜査、前科・前歴を持つ者への捜査もあわせると千五百人ほどがその対象となった。

足利署の道場に寝泊まりする捜査員たちへは市民から野菜・果物・おにぎりの差し入れがあいついだ。婦人会の炊き出しもあった。県知事が激励に訪れ、道場に扇風機数台を寄

贈した。警察庁の幹部たちもたびたび視察に訪れたうえ、刑事局捜査第一課長として宮崎勤被告の幼女連続殺人事件を担当解決した山本博一を七月に栃木県警本部長として送り込む。本庁の期待感は、いやでも現場捜査員に伝わり、少しでも疑わしい容疑者がいれば科捜研にタバコの吸いガラやティッシュが持ち込まれて唾液による血液鑑定が行われた。しかし、手作業の検査では一日二十件の鑑定が限度である。これを科捜研の所長が訴えると、千四百萬円の自動検査装置が購入された。十倍以上の件数の鑑定が可能になったのだ。

しかし、事件発生から半年たっても、有力な容疑者は浮かばなかった。初めの頃は頻繁に開かれていた記者会見も途絶えていたある日、森下捜査本部長が久々に発表したコメン

トは「目撃者はほぼ皆無」であった。
長期化する事件に、捜査本部は専従を五十
六人に縮小せざるをえなくなった。

「警察寝るな、税金返せー」

足利市民から、そんな非難の声もぶつけら
れるなか、休日を返上したり、家庭に帰らず
単身赴任となった捜査員も少なくなかった。
ある警官は専従ではなかったが、足利事件の
捜査で過労が重なり心筋梗塞で死亡した。捜
査員らの寝起きする道場には真実ちゃんの遺

渡良瀬川近くの堤防での現場検証

影が飾られた。捜査員たちは黙礼してから出
かけ、誰ともなく菓子やジュースを手に戻っ
てくるようになった。

「きちちゃったよー」

事件から半年後のそうしたある日。専従捜
査から市内福居町の駐在所に戻された寺崎耕
巡査部長が、地区の住人からの聞き込みで、
毎週土曜日と日曜日だけ借家に住む不審な中
年男の存在を知り、その借家を訪ねた。

「中をちよつと見せてもらえないかな」

寺崎にそう言われた中年男は、素直に家の中
にあげる。すると寺崎巡査部長は、部屋を
見回しながら、押し入れの前に立った。

「ちよつと、そこを開けてもらえないかな」

寺崎に求められるまま、中年男は押し入れ
を開けた。中に箱があるのが気になった寺崎
は、それは何かと尋ねる。

「これは大人が使うものです」

箱を開けた中年男は、寺崎に男性用のオナ
ニイ具であることを示した。

「じゃ、これはもうしまつていいですよ」

その後、寺崎はタバコを六本ぐらい吸う間
にボルビデオがたくさん並べられた部屋の
様子を眺めたという。そして、帰りに真実

ちゃんの事件についてこう聞いた。

「やってないね」

「やってません」

中年男は、はっきり答えた。こうして菅家
利和は捜査線上に初めて浮かびあがったので
ある。

四十四歳の中年男。独身。平日は実家で両親
と暮らすものの、休日にはボルビデオや
大人のオモチャで自慰にふけるため、借家を
借りている。パチンコ好き。市内の幼稚園で、
バスの運転手をしている。土地勘がある。

寺崎巡査部長の報告をうけ、さっそく専従
捜査員の手塚一郎警部補が菅家の勤務するA
幼稚園を訪問した。

「運転手の菅家のことで……」

手塚警部補に警察手帳を見せられたとた
ん、女性の園長は小さな叫び声をあげた。

「うわあ、きちちゃったよー」

手塚は、思わず身を乗り出した。

「えっ、どういう意味ですか？」

園長は、この年の四月から運転手に雇った
菅家が真実ちゃん殺しの犯人ではないかと疑
っていると手塚に打ち明けた。わけを尋ねら
れ、園長は一時間あまり菅家について話す。
このときの園長の話は菅家の逮捕後、警察が

園長からとった調書と同じ内容とのことなの
で、調書を引用しよう。

「菅家さんは男児よりも女児を多く相手にし
て、手を引いたり、両手をつないで跳び上が
るホッピング遊びをよくしていました。」

その時の顔は、普段は絶対見せることのない、
顔中満面の笑いで大満足という感じなの
です。具体的に女児のパンツを脱がしたり、
いたずら行為をしたところは見てませんが、
童話にたとえると、赤頭巾ちゃんを狙う狼み
たいに感じられたのです。赤頭巾ちゃんと仲
良くしている狼の顔は、満面の笑みを浮かべ
ていますが、狼の目の奥は光り、心の中では
いつ食べてやろうという下心がうずいている
のです。

園児と笑顔でねちねちたわむれている菅家

さんを見て、そう感じ、こういう人が幼児を
殺したり、いたずらするのではないかと、思
うようになったのです。何の証拠もありませ
んが、長年幼児の世話をする仕事をしている
者の勘とでもいえるのでしょうか、そう感じま
した」

しかし、彼女の息子である理事長をのぞい
て、菅家のこうした一面を認める職員はほか
にいなかった。また、園児の親から、同様の
指摘やイタズラをされたという苦情もない。
さらに言えば、菅家の小学校・中学校の同級
生や、十回ほど変わった職場の人々から取材
した限り、菅家の過去に前科もないどころ
か、変質的な行為を誰かに見られたことさ
えなかった。

ところで、このA幼稚園には真実ちゃん事

件より六年前に起こった幼児殺害事件の被害
者、有美ちゃんが通っていた。有美ちゃんは
行方不明になってから四ヵ月後に園から一
ほど離れた畑で白骨遺体として発見されて
いる。

園児をあずかる責任上、園長と理事長は、
保護者たちと呼びかけて私設の捜索隊を結成
し、一ヵ月間山狩りをしたという。遺体発見
後も警察とマスコミの対応に追われ、疲労困
憊の日々を送った。

「もう二度とあんなことに巻き込まれるのは
ごめんです」

二人は口をそろえる。園に菅家が勤め始め
て一ヵ月ほどで起きた真実ちゃん事件が、園
長らの菅家に抱くイメージに多少の作用を働
かせたとしても、それは仕方のないことだろ

う。それに、園長は、調書にもある通り、自分の印象には何の証拠もないと述べている。むしろ問題は、園長の話を聞いた捜査員の受けとめ方にある。

「救われました……」

手塚警部補は、園長たちに、そんな言葉を残して立ち去った。

捜査本部で容疑者リストにのせられた人々は、主に幼女へのイタズラ癖のある者、変質者、強姦などの前科・前歴がある者だった。なかには変質者の議員、SM趣味の教頭先生などというのもいた。しかし、菅家の場合には、幼女には性的関心を示しておらず、前科・前歴もない。借家にあった百二十三本のビデオにロリコンものは一本もなかった。むしろ彼は豊満な大人の女性が好きだったようで、それは彼のコレクションのタイトルを並べてみるとよくわかる。

『巨乳先生がやって来た』『巨乳はワルツにのって』『妹はホルスタイン』『巨乳一番しほり』『オヨヨ、デカイ乳じゃの』『巨乳みだら舞』『胸も尻もデカイ女』『巨乳若妻スザンヌ二十五歳』『SEXと巨乳とビデオテープ』『尻よりデカイ胸』……。

つまり、何か別の異常さを加算されない限り

可能かどうか相談を持ちかけたのだ。

「どれくらいの量があれば、できますか？」

理論的には、たとえ一個の精子でもPCR法によるDNA増幅は無限に可能である。しかし、繰り返すことでエラーがだんだん生じるので、科警研では三十回までと限っている。

「やってみれば、できるかもしれない……」

向山はそう答えたというが、結局のところ自信が持てず、断った。

事件未解決のまま年を越した栃木県警への重圧は、いやがうえにも増していった。それは、マスコミや地元市民の非難の聲ばかりではなかった。本庁幹部たちの関心や言動も「足利事件」に集中していた。

事件発生からまる一年たった九一年五月。新聞各紙に「警察庁がDNA型鑑定導入決定」

り、菅家を容疑者としてランクアップすることとは難しかったはずなのである。

手塚は、さっそく菅家の実家に行き、菅家に頼んでティッシュペーパーに唾液を付けてもらう。検査の結果、菅家の血液型は分泌型のB型と判明。真実ちゃんの遺体についていた唾液と同型だった。日本人におけるこの型の出現頻度は約一五％となる。

そして十二月三日。この一五％という数値によって、菅家は最も疑わしい人物のひとつと認識されたのだ。以来、逮捕までの一年間、菅家にはほぼ毎日、二人の専従捜査員による尾行が朝から夜まで続けられる。

ここで一五％という数値の意味をあらためて考えてみたい。たとえば捜査本部は、ロリコン趣味の愛好者を市内・隣接県で千五百人リストアップしたという。このなかに同一の血液型の者は、三百人ほどいることになるわけだ。しかし、その二つの根拠だけで、専従の尾行をつけられた者はいないのである。

菅家の場合、ロリコンではないからもちろんこのリストにすら入っていない。しかしA幼稚園の園長の「赤頭巾ちゃんの狼」という強烈なインパクトを持った刷り込みによってにわかに尾行をつけるほどの重要人物として

との報道がなされる。六月二十三日。菅家が借家からの帰りに捨てたゴミ袋から、精液のついたティッシュペーパーが捜査員によって採取される。なぜ、菅家だったのか。捜査本部の幹部は、こんな事情を話した。

「当時、尾行をつけた怪しい人間は四、五人いたけど、(捨てたゴミを)本人のものだと特定できるのは(借家では)一人暮らしの菅家しかいないわけさ。それに現場資料が微量で、たとえ鑑定できたとしても一人だけとなると、そのうちで一貫して専従を張りつけてきたのは奴だけだからね。菅家で行こうと……」

捜査本部にとって菅家は、掌に残った最後の一枚のコインだった。表か裏か、もうこの一枚を投げるしかなかったのだ。

「DNAがだめだったら、それはもう、神様

クローズアップされたのである。

だが、「救われました……」と感謝した手塚警部補は、一年にわたって菅家の行動確認を続けるなかで、園長らにこんなばやきを漏らすようになる。

「菅家は、パンツも盗らなげや、女の子に声掛けもしないんだ。別件で捕まえて自白させようにも、運転すりゃ一時停止までビシッと止まる。レンタルビデオ屋に行っても、『ロボ・コップ』とか『寅さん』とか、あーいう中学生のを観てんだもん。いわゆる、頭が悪いのか……」

鑑定受諾へのドンデン返し

事件から半年たった捜査本部にとって、菅家と犯人を結びつける物証は、依然、血液型だけであった。つまり、それは、B型・分泌型という、男性六・六人に一人が等しくかけられる嫌疑でしかなかった。

重要人物として菅家に尾行がつけられた十二月。科捜研の福島技官は、科警研の向山技官に再び鑑定依頼の電話を入れる。福島は、DNA型鑑定において、微量な資料でもDNAを増幅させるPCR法が開発されたことを知って、一度は断られた下着精液痕の鑑定が

しかわかんない……。勝負賭けるしかないって思ったよ」

別の幹部は、そう正直な心情を吐露した。しかし捜査本部がせっかく採取した最重要人物・菅家の資料は、この後、宙に浮いてしまふ。七月二日前後に県警が福島を通じて科警研へDNA型鑑定の打診をしたところ、向山はまたしても受けつけなかったのだ。

あきらめきれない県警は、再三、打診を繰り返した。ついに八月になってしびれを切らした捜査本部の幹部が、現場で指揮をとるH警部らに鑑定資料を持たせて科警研出張を命じ、向山に直談判を試みた。さらに、本庁からも指示を出してもらったと言う。

はたして、そこで両者にどんな話し合いがあったのか。現在は退官して、JRA・競走

馬総合研究所の室長となっている向山は取材には応じられぬとしながらも、そうした経緯については「忘れた」と言った。いまは宇都宮市で副署長となったH警部の方は「科警研へは行ってない」と言下に否定し、「取材に応じたら減給処分だ。訴えるぞ」と怒ってしまった。この話を聞かせてくれた元幹部は、あとで「記憶違いだった……」と電話で事実訂正をしてきた。

ことの真偽は藪の中だ。しかし、八月二十一日、ついに科警研は鑑定依頼の囑託を受け付けた。菅家の精液採取から、二ヵ月がたった。

その一週間後、四ヵ年計画でDNA型鑑定機器の全国配備の方針を固めた警察庁は、大蔵省に初年度予算一億六百万円の概算要求をする。

「このうえない吉報」

だが、菅家のDNA型鑑定は、この先もすんなりとは運ばなかった。県警は、九月早々にも判定が出ると予想していたが意外なほど時間がかったのだ。検査の作業そのものは、通常なら数日で終了する。科警研への依頼件数がよほど混んでなければ、一、二週間で結

果が出るはずだった。

やきもきした栃木県警は、何度も催促をする。しかし、鑑定の判定が遅れている事情について、具体的な説明は一切されなかった。そして、十一月六日を迎える。鑑定委嘱から二ヵ月半が過ぎたこの日、ようやく本庁経由で「DNA、合致」の連絡が捜査本部にもたらされたのである。

「このうえない吉報があった。われわれの執念の捜査が実り、こんな嬉しいことはない。科学的な鑑定だから間違いないと思うが、さらに慎重を期する。明日には、H警部らが詳しい判定結果を（科警研に向いて）聞く」

森下捜査本部長は、肅々と感慨を述べた。この一ヵ月ほど前に、栃木県内で起こった婦女連続強姦事件の一番公判で、裁判所がDNA型鑑定を補完的証拠として初めて採用する。捜査本部にとって菅家を起訴・立件するうえで自信を与えるニュースだった。しかも、その事件でのDNAの一致率は、千六百万人に一人とうたわれていた。

しかし、実際のところ、実用化されたばかりのDNA型鑑定について、捜査本部の幹部以下捜査員たちの間では「DNAってなんだべ」というほどの認識でしかなかった。

れば鑑定できる方法のはずなのに、その七・五倍もの量が必要なほどDNAが壊れていた精子を、三十回も増幅したうえで型判定することの科学的な信頼性が判決では全く吟味されていないのだ。

向山は、DNA型鑑定一致の報に小躍りして説明を受けに上京した足利事件捜査本部の面々に、愚痴とも怒りともつかぬ、おおよそこんな言葉をこぼしたという。

「どうしてこんなに少ない資料を囑託してきただんですか。えらい苦勞をしました。必死でやりましたけど、あまりにも微量でDQαの方はできなかった……」

捜査員たちと同様、「必死の苦勞」の末に、大金星をあげたこのDNA型鑑定人は喜ぶどころか不意ともいえる感情を露出した。彼

それは、合致の報告を受けた翌日に科警研でDNA型鑑定の説明を半日ばかりで聞いた幹部やH警部でさえも同じだった。H警部は控訴審の公判で、弁護人から追及されて苦しい答弁をすることになる。

「私は、DNAがわからないわけですね。言葉は聞いたことがあったんですが、わからない……。しかし、聞いてもなかなか……。なかなかというか、結果的には理解できなかったというふうな記憶をしています」

つまり、足利事件の捜査本部は、DNA型鑑定を、あたかも指紋が一致したかのよう信じた。

科警研は、犯罪捜査に四種類のDNA型鑑定法を活用している。資料が豊富にあれば、それぞれ異なったDNAの部位の型を判定し、その出現頻度を掛け合わせることで、百万分の一以上の確率さえもはじきだされてくる。DNA型鑑定が、指紋とほぼ同様の個人識別能力を持つといわれるのは、こうした複数の鑑定が可能だった時に限られるのだ。

菅家のDNA型鑑定を行った向山は、じつは二種類の型鑑定を試みようとしていた。一つは、MCT一八型という、比較的少ない資料でも鑑定できる方法で、向山が中心とな

は、技官であり、MCT一八型鑑定を開発した科学者の一人である。自分で開発した自動車に過重な荷を積まれて走らされ、そのドライブ・テクニクでかろうじてゴールはしたけれど、それは暴走だったという思いがあったのではないだろうか。警察組織の中にあつて、科学者とは別な立場によって鑑定に踏み切ったのではないか。

この鑑定書を書いた半年後、向山は停年まで十年を余して科警研を退官する。本人は円満退官だったと言う。転職先の仕事は、馬の親子判定や個体識別の研究である。そこではDNA型鑑定が、血なまぐさい犯罪捜査ではなく、優れた競走馬の育種として活用される。民間人となつたいまも、彼は取材を拒み、語ろうとしない。

って科警研が独自に開発したものだ。保存状態がよく損傷のない精子なら、二ダシ（約八百個）あれば十分に鑑定可能という。

もう一つは、HLA・DQα型という方法で、MCT一八型の十倍量が必要とされる。向山は、下着の精液痕七ヵ所のうち、最も多く精子が残存しているとみられる二ヵ所から、三十ダシの精子を抽出精製したとしながらも、かなりDNAが壊れていることが推定されたため、その全量もMCT一八型の鑑定に使い切ってしまったと控訴審で証言した。つまり、二ヵ所それぞれを鑑定したから、十五ダシを使つて一回ずつ検査した。それが、菅家のものと二ヵ所とも同一の型であることが判定されたというのだ。

しかし、ここに大きな疑問が残る。二ダシあ

火がついた導火線

DNA型一致によって、足利事件で長らく足踏みを続けてきた捜査は、一挙に大詰めに向かつて動き出した。

「十年、二十年先の控訴公判にも耐える証拠固めと、裏付け捜査をせよ」

警察庁トップである金沢沼雄長官からの厳命が、捜査本部に下った。捜査本部は、本庁幹部や検察と合同で極秘の検討会を繰り返すことになる。

「DNA一本で公判が維持できるかどうか、詳細に検討をしましたが、結局、他にも物証が必要だということになった。我々としては、絶対に負け戦はできなかった……」

幹部の一人は、検討会の内容について触れることを避けたが、自白偏重や見込み捜査を一切排除する姿勢をつらぬいていたと胸を張った。

しかし、結局、捜査本部は、菅家を逮捕する前に、DNA型・血液型鑑定をのぞいて、何の物証も得られなかったのだ。

十一月六日の吉報から、二十日が過ぎた。

この日、十一月二十五日付で科警研の向山技官は、DNA型判定一致の鑑定書を県警本部

長あてに提出した。しかし、捜査本部はこれをもってしても逮捕には踏み切らなかった。

「菅家の犯行を裏付ける目撃者が一人でも現われてくれたら、それもできたんですが……。かといって、もうこれ以上捜査をしても、時間が経つばかりだった……。菅家を任意で取り調べて、自供がとれてから逮捕する。落ちなければ、帰すことにした」

十一月二十九日、捜査本部は菅家の事情聴取を二日後と決めた。本人が嫌だと言えは任意同行はできず、犯行を否認すれば逮捕はしない。きわめて慎重な構えであったと二人の幹部は口をそろえた。

「もちろん、本庁と相談のうえでの決定でした。この情報は、絶対に漏らしてはならない。保秘厳守のはずだったんですが……」

ところが十二月一日の午前一時頃、森下捜査本部長の自宅に記者たちが押し掛け、数分置きにインタホンを鳴らしはじめた。すでにこの時点で重要参考人聴取を報じる社会面トップ記事が、全国紙三紙（朝日・毎日・読売）の東京本社版当日朝刊に組み込まれていた。

「本部長は怒ってたよ。地元紙には出なかったら。おれたちはやんないさあ。苦しい人は言えない。関係ない人が言うんですよ」

捜査本部の幹部は、警察庁のリークであることを示唆する。実際には毎日新聞が先行取材しており、一紙だけ抜け駆けを許せば、取材競争が激しくなるので、本庁はそれを抑えるため、ほかの二紙にリークしたものと思われる。キャリアの「関係ない人」が流した情報に頼った二紙のスクープは、DNAが参考人の毛髪と一致したという誤報となった。

いずれにしろ、ここにDNA型鑑定のお披露目としてかっこうの舞台ができあがった。もはや、犯人逮捕という打ち上げ花火に向けて導火線に火がつけられてしまったのだ。

一日の未明に自宅裏の塀を乗り越えて、記者たちをだし抜いたつもりの森下捜査本部長は、足利署に到着しておそらく目を丸くしたことだろう。そこには百名を超す報道陣にテレビ中継車までが詰めかけていた。

重要参考人の事情聴取を極秘で行う予定でいた捜査本部へのブレッシャーは、否応なく増した。

そして午前七時過ぎ。これまで現場で両輪となつて指揮をとってきた芳村武夫警視と橋本文夫警部ら五人の捜査員が、福居町にある菅家の借家を訪ねたのである。

（以下次号／文中敬称略）